

NPO 高齢社会をよくする女性の会 会報

No.164 2005年12月発行
NPO法人高齢社会をよくする女性の会
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-3356-3564
FAX. 03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477



—目次—

10月例会 平成17年度東京ウィメンズプラザ フォーラム参加	
災難は忘れる前にやってくる!	1
グループより報告	
高齢社会をよくする女性の会岐阜	4
男・老いを語る③吉田一平	5
リレー・エッセイ④松岡紋子	6
11月例会 北京JAC第10回全国シンポジウム	7
本の紹介・ご案内・事務局だより	8

◆十月例会 平成十七年度東京ウィメンズプラザフォーラム参加

二〇〇五年十月十四日(金)

於・東京ウィメンズプラザホール

「災難は忘れる前にやってくる!」

〜そのとき高齢者・女こどもはどうする〜

講師/パネラー・小山 剛 (長岡市「こぶし園」園長)

パネラー・小宮 恵理子 (内閣府男女共同参画局総務課)

山 林 知左子 (阪神淡路大震災被災者・本会会員)

平 石 京 (中越地震被災者・本会グループ会員代表)

コーディネーター・樋口 恵子 (本会理事長)

司 会 進 行・沖 藤 典子 (本会副理事長)

袖 井 孝 子 (本会副理事長)

国内外を問わず大災害が続き、災害弱者と言われる高齢者やこども、女性の防災、災害対策について基調講演とシンポジウムを開催した。

小山剛氏基調講演

中越地震当日、余震のなか職員は自分も被災者なのに50人以上集まって、明日の配食サービスの計画をたてていた。こうした職員を支えるのはひとえに倫理性。介護は連続性が必要で、地震だから中断するわけにはいかない。180人の定員に対し、一時は250人が生活した。認知症、おむつ替えは体育館の避難所

ぐらしでは無理なので、こぶし園で引き受けたが、地震による生活災害は長引くと介護災害になる。神戸の先例から見て、こぶし園では抱え込みすぎないこと、早く高齢者を自宅に帰すことを目指して、通所介護の再開を急いだ。11月には、在宅から避難した要介護者の多くは帰宅できた。仮設住宅に1200人住むと、その中にも自由に集まれるサポートセンタ

ーをつくる必要を痛感した。

大規模災害は、専門職も福祉学生もいっせいに被災者になり、施設設備も破壊されることだ。体だけ来てくれたり、「泊まる場所を用意せよ」では、ボランティアはかえって迷惑。自衛隊が喜ばれるのは「衣食住」が自前だから。仙台から、プレハブ付きで、40人が10日交替で来てくれたのは有り難かった。

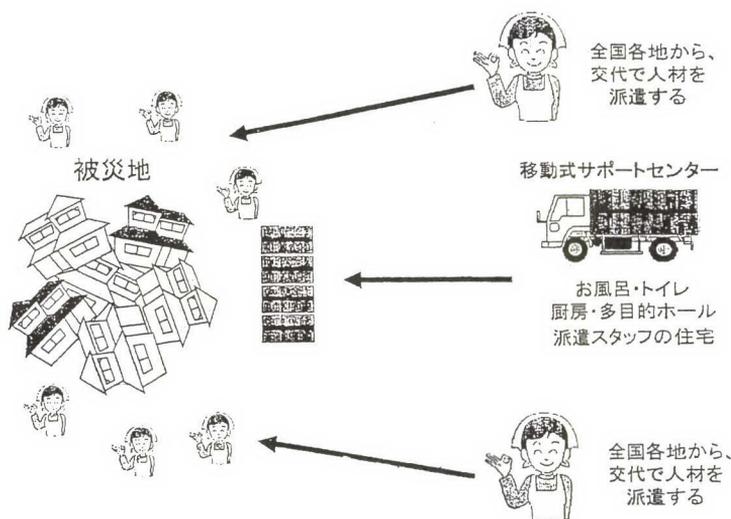
雪の中で生きてきた高齢者、とくに女性には強い。女性は「お茶飲みませんか」で集まってくるが、男性は「お茶」では集まらず、孤立してアルコールに依存したりする。男性対策が必要ではないか。

ガス、水道のライフラインと医療は、全国的自動的に救援が出勤するシステムができている。今回、介護の世界だけそのシステムが未整備で、こちらから「助けて」と声を上げないと救援が来ない、という事実に向直した。

そこで、企業・行政・個人に呼び掛けて、緊急時には、全国から組織的に配備されたトラックが動きだす、というシステムを創設した。そのトラックは企業の

広告入りなので、広告収入が入る。このような全国的システムを「サンダーバード」と名付けて8月に立ち上げたところである。

サンダーバードネットワーク図



【討論】

〔阪神淡路大震災の被災者・山林知左子さん〕

当時神戸市「しあわせの村」職員。樋口代表から「ほしいものは？」と聞かれ、即座に「女性には湯上りの化粧水などが必要」と答え、エイボンから送られてきた。段ボール外側に大きく商品名が記されていて配るのに便利だった。

避難所では女性は壊れた自宅と往復して多忙なのに、職を失った男性は文庫本を片手に「俺の下着はどこだ」と言う。被災時のジェンダーが目立った。

私はいまだに夜パジャマに着替えられない。心の傷を負っている。住居を失い近所に新築、現役世代の交流のため、ほどこい距離で年4回集まる「リサナメント（イタリア語で再生の意）」をつくり、地域多世代の交流につとめている。

〔中越地震に際し、地元の救援活動をした「長岡老いを考える会」（本会グループ会員）の平石京・代表〕

本会ははじめ各方面からお見舞い・ご連



絡をいただき、みんなして「よかった、忘れられていなかった」と喜び合った。山古志村は高齢化率40%、恐怖がさめないうちにと、記録集を出した。①重度の要介護者、障がい者は避難所に行かれない、情報がない②高齢者は足まといに

司会の樋口恵子、パネラーの小宮恵理子、小山剛、平石京、山林知左子さん。

なるまいと健気③地域の自主防災組織は大災害では動けない。命は自分と小さな地域で守るしかない④仮設住宅の20%は高齢者でローンが組めない。高齢者などが他人の意識の中に存在しなくなることが怖い。わが家でも夫はもともと高血圧、11月心筋梗塞で手術、私は介護で腰痛、鎮痛剤服用と今も後遺症が続いている。

小宮恵理子（内閣府男女共同参画局から紅一点現地入りして救援策を担当）

避難所には女性と高齢者が多く、男性は行政、ボランティア。男性は被災後ただちに職場に復帰し、共働きでも緊急時の育児、介護は女性が担っている。支える側には女性自衛官、女性警察官で「雪椿隊」を組織、避難所パトロール、相談事業にあたる。しかし防災は力仕事と解釈されていたようで、新潟県地震対策本部員、内閣府防災部局にも女性ゼロ。

避難所で女性は授乳、着換え、トイレ、子どもの泣き声の気兼ねなど問題は山積しているのに「困っていることは？」と聞かれても本音が出ない。女性独自の視

点が防災対策にないことがわかり、フリーダイヤルの女性相談窓口を設置してもらった。地域の女性が防災マップをつくる動きも出てきた。男女共同参画計画に防災の問題が初めて入ったのは幸いである。

小山剛（会場から、個人情報保護法と地域の要介護者等の存在をつかむ際の矛盾を問われて）

緊急時においては倫理行動が優先する。まず救うこと。法律は事後処理のためにある。それにしても、施設は結局「避難所」で真にプライバシーが守られるところではない。在宅が基本である。

【司会、樋口の感想】

濃密な本日の内容を本会としての研究と提言につなげたい。水道のバルブの規格が自治体ごとに違う（山林発言）など、地方分権の内容が問われる。災害による建築やリフォーム詐欺が横行し「災害前倒し被害」に合わぬよう、地域の人間関係づくりをすすめたい。（樋口恵子・記）

設立10周年を迎えて

設立10周年記念事業

地域福祉推進フォーラム2005

高齢社会をよくする女性の会岐阜
代表 久世 須磨子

設立10周年を無事迎えることができ、関係各位の温かいご指導ご支援に心から感謝致しております。そして今心に残っているものは、1周年記念に樋口代表から「公的介護保険の必要性、寝たふり自治体を起こしていくのはあなた達です…」。豊かな老後は自分達で参画して創るもの、と云う意識の芽生えを感じた会でした。

3県合同で開催した第17回全国大会は大きな収穫でした。介護保険関係の審議会の情報が公開されている事、策定委員の「市民公募」等を知り、参加する意欲を持つきっかけとなり、1万人市民委員会にも参加したり、大会を機会に一気に盛り上がり前進できました。

5周年記念事業では岩川町長をお迎えし「みんなで育てる介護保険」をテーマにしたシンポジウムを開催。その後鷹巣のケアタウン等福祉先進地へ視察旅行に出かけました。昨年はデンマークへも行ってきました。

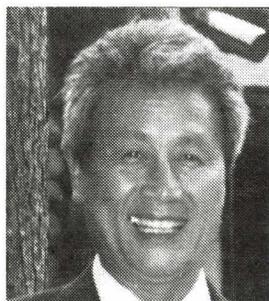
地域福祉推進フォーラムとして取り組み始めて4年目に当たる今回のフォーラムは、設立10周年記念事業として、県の男女共同参画推進サポーター協働事業と共催する事ができ、幅広い層の参加を得て会場は満席。「人生100年を生きる覚悟と快楽」の基調講演において「高齢社会はこれから本番。団塊の世代は今の高齢者とは意識が違う。人生100年の生き方、不自由にはどのように立ち向かって生きるのか若い人に伝える役割がある…」、と云う言葉は初めて参加した人をも感動させました。

小規模多機能地域密着型はこれからの潮流。最大の介護予防はすべての人に「居場所と出番」を、「歩いて買物、近くに仲間」と介護予防の街づくりのあり方等登壇者からの貴重な体験や提言は今後の活動の指針とします。

最後は樋口理事長の替え歌「手のひらを太陽に」の歌声が会場に響き渡りました。



替え歌を大合唱する樋口理事長、久世代表、他の皆さま



「安全・快適・便利」は、地域を 孤独と不安で不健康にする！

よしだ かずひら
吉田 一平 (ゴジカラ村代表)

1946年長久手町生まれ。雑木林に囲まれた幼稚園や専門学校、老人福祉施設等を擁するゴジカラ村代表。不便で煩わしい多世代交流のある地域にこそ、人の暮らしがある。

連絡先：ゴジカラ村役場株式会社 TEL 0561-64-5737

昔、畑仕事を生業にしていた頃の暮らしには、勝手知りたる隣組のおせっかいがあり、田畑の管理も協働を避けられず、困り事は長老に尋ね、子供達も作業の担い手だった。

向こう三軒両隣の何かと煩わしいつきあいはあったが、その中に歳相応の役割やつとめもあった。

ところが今や、誰もが安全・快適・便利を求めて金儲けに忙しく、セキュリティや個が重視され、隣近所に迷惑をかけるだけの希薄な人間関係になってしまった。

結果、要介護状態になると、これまで築いてきた社会的立場や居場所等を失い、喪失感や孤独感を抱え、寂しい時間を送っている。

在宅では、ヘルパーや看護師らのビジネスとしての訪問がある以外、隣近所や昔の仲間はずれも来ない。

安心のほろの施設でも、面会者はいつしか疎遠になり、もの言わず過ごす孤独な日々が続く現実を、私は19年見てきた。

そこで、「不便で手間暇かかって、採

め事が多くて煩わしい、決して快適でも安全でもない」世の中とは天地逆転の村づくりを始めた。

それは、1000万の種別株式を購入し、4000万の入村金を払った村民や、入村はしないが一口30万の種別株式を購入した出資者等が、村で必要な仕事や活動等を探し、その働き方や給与の仕組み等を、他人に頼らず自分達で考えるところから参画することで、誰もが誰かの役に立ち、生きがいや楽しみ、生涯自分の役割や居場所がある村づくり計画である。

家には、よその子達が好き勝手に出入りし、2階は女子学生に下宿を斡旋。

村の道路や家屋の修繕、夜回り、ご近所づきあい：共に汗を流して働いて、共に酒を酌み交わす。喧々諤々、悲喜ごもごも…。



美しく

豊かに老いたい！

松岡紋子



「今日は、みちさんの家へ遊びに行ってきたよ」。補助車を押しした94歳の佐藤さんが、にこやかにゆつくり通つていききました。

昨年4月町内にいきいきサロン「みどりの会」を立ち上げました。近隣の町内に比べて極度に高齢化率の高い我が町の介護予防支援策を考えた上での立ち上げでありました。

70歳以上の独り暮らし、老夫婦、昼間1人、もしくは老夫婦のみで暮らししている人たちに呼びかけました。

会員とボランティアの協働、つまり会

員と支えるボランティアの関係ではなく、それぞれの個性や特技を尊重し合う年間計画のもとで1年が過ぎました。

75歳のカラオケの先生、昔の遊びの再現、その道具づくり、民舞の指導、四季折々の年中行事などお年寄りに学び、若いボランティアはみんなのできる元気体操や行事の段取りをするなど、月1回のサロンは、あつという間に1年が過ぎてしまった感じがしています。

94歳の佐藤さんの独り暮らしは同じ独り暮らしのみちさんとの交流によって共に豊かになりました。昔とった杵柄、床

の間に眠っていた三味線を出してまた音を出し始めた田山さん、折紙は頭の体操と仲間と集まって教えあいながら続けている遠藤さんグループ……会員もボランティアもそれぞれが生き生き、美しく豊かになっている。と自信がもてるようになりました。

折しも今朝の新聞は、介護保険改正案が衆院厚生委員会でも可決したと報じました。改正案は増え続ける介護給付費を抑えるのが主な目的、介護の必要度の低い「要支援者」や「要介護(1)」の人たちを対象に状態悪化を防ぐ介護予防サービスを新たに導入する、と記されていました。私たちは、老後の幸せはなるべく長く介護保険のお世話にならないこと、を相言葉に、筋トレも栄養改善も先き取りしながら、地域の人々との協働で、美しく豊かに老いる道を拓いていきたいと努力しています。

プロフィール

高齢社会をよくする女性の会会員。元小中学校教員。前静岡県議会議員(3期12年)現在は地域福祉、男女共同参画活動に力を注いでいる。

二〇〇五年十一月十三日(日)

於・国立女性教育会館 又エック

北京JAC 第10回全国シンポジウム

北京10ヶ月女性の確立と脱軍事化・脱暴力

第18分科会女性問題としての高齢者虐待

なぜおばあさんはいじめられるのか

問題提起者・中村雪江 (城西国際大学客員教授)

高東幸子 (NPO法人ネットワーク虹)

山田理加 (NPO法人ネットワーク虹)

阿武桂 (主婦)

司会・樋口恵子 (当会理事長)

袖井孝子 (当会副理事長)

まず中村氏からは、被害者は圧倒的に超高齢の女性が多いこと、虐待者には息子が多いが、息子自身、失業、アル中、心の病などの問題を抱えていること、虐待以前の親子関係に問題のあることなど、いくつかの調査結果を基に、高齢者虐待の実態が明らかにされた。

高東・山田両氏からは、女性のための「全国共通DVホットライン」から、入院中の妻の病院食を食べ、自分の洗濯物を押しつける男性の例を始めとして、衝

撃的な実例が紹介された。さらに高齢女性にホットラインの存在を周知させることの難しさが指摘された。

阿武氏からは、定年で在宅時間の延びた男性が妻の行動を管理し、身体的心理的暴力を加える背景には、女性の経済的依存性があることが指摘され、高齢者夫婦におけるDVは高齢者虐待にほかならないことが明示された。

樋口理事長からは、昨年5月に当会が

坂口厚生労働大臣に提出した「高齢者虐

待ゼロ社会をめざす提言」が紹介され、続いて本年11月1日に成立し、来年の4月1日から施行される高齢者虐待防止法の概要の説明があった。

会場からは、家族暴力を一括する法律が必要であること、被虐待者の措置入所が想定されているが、待機者の多い施設で受け入れが可能か、相談窓口で適切な対応ができる人材がいるのか等虐待防止法への不安が示された。こうした不安を払拭し、よりよい虐待防止法に向けて、当会からは新たな提言書を作成することを約束して閉会した。

(袖井孝子・記)



左から袖井、樋口、山田、阿武の登壇者の皆さま

本の紹介

「子どもの世話にならずに死ぬ方法」

俵 萌子著

中央公論新社 一七〇〇円十税
自分で自分の本を紹介するのも何ですが、この本は、65冊の私の本の中で、いちばん手こずった本でした。

まず、第一に書きおろしであること。

「400字、400枚くらい書いていただけますかのー」

と中央公論新社のFさんいわれ、夕方暮れた。この忙しさの中で、締切日もはつきりしない原稿を、400枚も書くなんて……。途中で、何度も投げ出しなくなった。

われながら頑張った、と思う。ひとえに亡くなった母のお陰である。

（私が居なくなったら、あなたは、本を書けないのネ）

と亡き母からいわれたくない。母からの自立を、自分に課するための本でもあった。5年間、100カ所の各種老人ホームを歩いた。母を入れたくなるようなホームを探して……。そして、私自身入ってもいいと思うホームを探して……。

「介護ふれあい大賞」

大募集について、ご案内

このたび「介護ふれあい大賞」（産経新聞社他主催）が設けられ、私たち「高齢社会をよくする女性の会」も高齢社会NGO連携協議会などとともに協力することになりました。

審査委員長は作家の立松和平さん、樋口恵子が副委員長をつとめます。

女性をはじめとする介護現場にいるご家族、専門家そして要介護者を含めた高齢者自身の声が、これを機会により広くより深く社会全体に届けられるよう願っています。

人生100年時代の人間の営みに必須の介護について、ことばに出して語ることから理解がすすみます。

詳細は別紙のチラシをご参照下さい。
1等賞は100万円相当とか！ 1月15日〆切とありますが、2月15日に〆切日が延期されました。

会員内外の皆さま、振るってご応募下さい。

（樋口恵子・記）

（財）俱進会助成事業報告会終わる

昨年度研究助成を受けて「高齢女性の就労調査」を行ないましたが、去る11月19日、ホテルJALシティ四谷で、事業報告会が開催されました。

助成事業66件のうち報告は17件。その内の一つとして本会は研究申請者樋口恵子さん、研究者・袖井孝子、高見澤たか子さんが研究全容を報告。テーマの目新しさと海外へも広がっていることに注目が集まりました。

事務局日より

☆年末・年始休業について、26日(月)が仕事納め、新年は11日(水)からとさせていただきます。本年も大変お世話になりました。（会費納入をお忘れの方よろしくお願ひします）どうぞよいお年をお迎えくださいませ。

（事務局一同）



樋口さん、高見澤さん、袖井さん